（第3種郵便物認可）　2026年（令和8年）1月20日（火曜日）　読売新聞

読売新聞社賞に2人

川村さん、串上さん　喜び

作文コンクール

第75回全国小・中学校作文コンクールの中央審査で、川口市立幸町小3年の川村笑麻さんが小学校低学年の部で、開智小4年の串上葵子さんが同高学年の部でそれぞれ読売新聞社賞に選ばれた。2人に喜びの声を聞いた。

曽祖父の体験を聞いて

小学校低学年の部
川村（かわむら）笑麻（えま）さん
川口市立幸町小3年

「自分の思いがたくさんの人に伝わったことがうれしい」と語る。

小学2年の夏に広島の原爆資料館を訪れ、原爆の子の像に100羽の折り鶴をささげた。その後、祖父・本吉正之さん(70)から、戦時中に軍医として満州（現中国東北部）に赴いた曽祖父（正之さんの父）の体験を聞いたことが、作文に向き合うきっかけとなった。

初めは満州の場所も分からなかったが、聞いた話を日記に書き留めるうち、「多くの人の普通の生活が奪われる戦争は恐ろしい」と思った。平和への思いを伝えたいという気持ちが、強くなっていった。

原爆資料館で見た衝撃的な展示の数々を思い出すと、恐ろしさがこみ上げ、なかなか言葉にすることができなかった。記憶が自分の中から消えないよう、約1年がかりで原稿用紙8枚にしたためた。正之さんにも聞き取りを重ね、当時の方言も忠実に書き起こした。

最近も報道でパレスチナやウクライナでの悲劇を目にすると、「戦争は決して過去の話ではない」と痛感するという。今後は、長崎や沖縄を訪れて学びを深め、世界に平和の大切さを訴えていくことが目標だ。

折り鶴を手に笑顔を見せる川村さん（12日、川口市で）

学校の楽しさ　毎日実感

小学校高学年の部
串上（くしがみ）葵子（きこ）さん
開智小4年

「とてもうれしい。家族も喜んでくれて、受賞を褒めてもらった」と顔をほころばせる。

約1年前、父親が病気で入院した。その間の不安やつらい経験、学んだことを「忘れたくない」と、作文コンクールに応募したという。作文はあまり得意ではないというが、思いをつづり原稿用紙12枚の力作を完成させた。

父親の入院中は学校を休む日が続いた。朝になると体が重くなり、「家にいたい」と思うようになった。

「学校は好きなのに、なぜか行けなくてつらい気持ちだった」と振り返る。

半年以上入院した父親が家に戻ってくると、にぎやかさも戻った。学校にも通えるようになり、それ以来ほとんど休まなくなったという。友達と休み時間に遊んだり、授業を受けたりする毎日の楽しさを感じている。「学校で遊ぶのが好き。勉強も頑張ってテストで良い結果を出したい」と話した。

趣味は読書やアニメ作品の視聴だ。最近は国語や算数などの教科を擬人化した恋愛小説「時間割男子」や、赤血球や白血球など体の細胞をキャラクターにした作品「はたらく細胞」がお気に入りという。

学校の楽しさを語る串上さん（14日、さいたま市岩槻区で）

主催＝読売新聞社
後援＝文部科学省ほか
協賛＝JR東日本、JR東海、JR西日本、日本テレビ放送網、日本書芸院、光村印刷
協力＝三菱鉛筆